

<追悼文>追悼 中本正智さんを偲ぶ

比嘉, 実

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

1995-02-24

<追悼文>

追悼 中本正智さんを偲ぶ

比 嘉 実

中本さん

つい3週間ばかりまえお目にかかった時にお元気な様子に接し、その回復ぶりに喜んでいましたのに、今日、このような場に立って別れのあいさつをするようになるとは夢にも思いませんでした。

25年前、私や友人の仲程昌徳さんが沖縄から上京したときに、中本さん、あなたはすでに日本言語学会や国語学会、方言学会において若手研究者として活躍しておられました。私たちは琉球大学時代、共通の恩師である仲宗根政善先生から、東京での中本さんのご活躍ぶりを学部学生のころいつも聞いていました。

それが刺激となり、中本さんを目指して多くの言語研究者が都立大学の大学院にやってきました。現在の沖縄における言語研究隆盛の草分けとして中本さんは多くの実績を残されております。しかし、中本さんが常々話されていた、これからのお仕事の多くの研究課題からみますと、中本さんにとってこれまでの研究は助走にすぎないものだという事を私は感じております。

二人で沖縄の古典『おもろさうし』の厳密なテキストを作り、全注釈をやろうと語り合ったのもそのひとつでありました。最後にお目にかかった時に、「中本さん、テキストはできましたよ、そろそろ長い休暇をきりあげて戻って来てください」と私はあなたに冗談をいいました。その時にあなたはにっこり笑ってやさしくうなずいてくれました。慈悲に満ちた目をされておりました。すでにすべての運命をうけとめようと思いつめていたのかも知れません。

20余年の短いおつきあいでありました。しかし、何にも代え難いものを、実に多くのことを教えていただきました。言語学者でない私に、中本さんの学問を語る資格はございませんが、自然科学に近い言語理論、私にはとうてい理解の及ばない事柄を実に平易な言葉で語ってくれました。中本さんの論文は、言語の専門家だけでなく、歴史、文学、民俗研究などの隣接する学問にも重要な示唆を与えて下さいました。

中本さんの学問的な幅の広さ、奥行きへの深さは研究者としての知識の外に、成人するまでの奥武島での生活が大きいのではないかと思います。奥武島の漁師たちの生活ぶりを話す時に興味の尽きないものが中本さんの口から次々に続いて出てまいりました。それは生まれ島、奥武島への自信、誇りであり、島に暮らす人々への愛情が自然に滲み出てまいりました。奥

武島の漁師たちは夜の航海でも船べりを打つ波の音でどこの津口かを聞き分けることができるとよく話されていました。

自然のささやきを聞き逃さない慎みと気品が中本さんの学問の本質ではないか、と私は思っています。中本さん、あなたはマラソン走者のように休む間もなく走り続けてきました。そしてあの頑健な肉体が病に侵され、倒れてしまいました。残念の極みです。もう少しでもいい、ともに走って見たかったとの思いはつきません。でも、あなたが育んだすぐれた研究者が、きっと、あなたの蒔いた種子を豊かに実らせてくれることを私は信じています。志し半ばという感じを拭えませんが、今はもうゆっくりとお休みください。

中本さん、さようなら

1994年2月24日、上福岡カトリック教会にて

(法政大学沖縄文化研究所所長)



法政大学沖縄文化研究所公開講演会風景